

Title	オトガイ舌骨筋および舌骨下筋を中心としたラット鰓下筋群支配運動神経細胞の局在と末梢経路—HRP法による研究
Author(s)	西口, 隆彦
Citation	大阪大学, 1983, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/33337">https://hdl.handle.net/11094/33337</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名・(本籍)	にし 西	ぐち 口	たか 隆	ひこ 彦
学位の種類	歯	学	博	士
学位記番号	第	6018	号	
学位授与の日付	昭和58年3月25日			
学位授与の要件	歯学研究科 歯学基礎系専攻 学位規則第5条第1項該当			
学位論文題目	オトガイ舌骨筋および舌骨下筋を中心としたラット鰓下筋群 支配運動神経細胞の局在と末梢経路—HRP法による研究			
論文審査委員	(主査) 教授	堀	章	
	(副査) 教授	八木	俊雄	助教授 森本 俊文 助教授 松矢 篤三

### 論 文 内 容 の 要 旨

舌筋, オトガイ舌骨筋: GHおよび舌骨下筋(甲状舌骨筋: TH, 胸骨舌骨筋: SH, 胸骨甲状筋: ST, 肩甲舌骨筋: OH)は, 共に鰓下筋群に属し, 系統・個体発生的に密接に関連するが, これら筋支配運動神経細胞存在域(以下, 支配運動神経細胞をMNと略す)の位置的関連についての研究は殆んどなく, また, 舌骨下筋各筋MNの局在に関する報告も少ない。これら鰓下筋群は舌下神経と頸神経の吻合により形成される Plexus hypoglossocervicalisに支配されるが, この神経叢の見地からすると, これら筋の運動支配を舌下神経支配と頸神経支配とに明瞭に区分する従来の記載は再考を要するものと思われる。本研究では, HRP法を用い, ラット舌筋, GHおよび舌骨下筋各筋MNの中枢局在ならびにその位置的関連を調べるとともに, これら鰓下筋群MN軸索の末梢経路についても検討を行った。

実験には58匹のS-D系雄性ラット(体重150~250g)を用い, 25%-HRP溶液を舌下神経および上記5筋に下記条件下で注入し, 16~24時間動物を生存させた後, 延・頸髄を摘出し, 通法に従い Benzidine反応を施し HRP陽性細胞の分布を検索した。なお, 本実験での舌下神経へのHRPの注入は全て頸神経ワナ上根起始部より末梢側で, 舌下神経の切断は同起始部より中枢側で行った。

I. 舌下神経(3匹)およびGH, TH, SH, ST, OH各筋(各5匹)にHRPを一側性に注入した。

II. GHおよび舌下神経については, 舌下神経を一側性に切断の後(各3匹), また, 舌下神経と同側頸神経ワナ上根(各3匹)あるいは舌下神経と同側第1頸神経(各3匹)の両方を一側性に切断の後, 両側性にHRPの注入を行った。一方, 舌骨下筋については, 各3匹を用い, THでは第1頸神経を, SH・ST・OHでは第1から第3頸神経を一側性に切断の後, 両側性にHRPの注入を行った。

H R P陽性細胞は注入側にのみ出現し、G H注入例では舌下神経核中央の高さの同核腹外側部に始まり、しだいにこれより分離し、延・頸髄移行部で前角背内側核に近接して終わる舌下神経核腹外側垂核にみとめられる。一方、舌下神経注入例では舌下神経主核および腹外側垂核からなる舌下神経核全域に陽性細胞が出現し、舌下神経主核は舌筋を支配するものと考えられる。T H注入例では、延・頸髄移行部で舌下神経主核につづく中心管腹外方に始まり、C<sub>1</sub>尾側で前角背内側核に終わる細胞群を形成する。O H注入例では、延・頸髄移行部で中心管腹外方にはじめて出現し、それより尾方ではC<sub>1</sub>からC<sub>3</sub>の前角背内側核とC<sub>2</sub>中央からC<sub>3</sub>の前角腹外側核に陽性細胞が出現する。S H・S T注入例の陽性細胞分布域はO Hの場合とほぼ同様であるが、S H注入例ではC<sub>2</sub>尾側半の腹外側核とC<sub>3</sub>の背内側核での、S T注入例ではさらに延・頸髄移行部での陽性細胞がみとめられない。

G H注入例での舌下神経核腹外側垂核の陽性細胞は舌下神経切断により大部分が消失するが、延・頸髄移行部では少数の陽性細胞がみとめられ、これら陽性細胞は第1頸神経または頸神経ワナ上根の追加切断によりはじめて消失する。舌下神経注入例では舌下神経切断により舌下神経核吻側 $\frac{3}{4}$ の陽性細胞は全て消失するが、尾側 $\frac{1}{4}$ では腹外側垂核および舌筋支配の舌下神経主核に陽性細胞が少数みとめられ、これら陽性細胞は頸神経ワナ上根または第1頸神経の追加切断によりはじめて消失する。すなわち、G Hおよび舌筋支配の舌下神経核内の大部分の陽性細胞の軸索は舌下神経を經由するが、少数ながら第1頸神経から頸神経ワナ上根を經由するものが存在する。T H陽性細胞は第1頸神経の切断により、S H・S T・O H陽性細胞は第1から第3頸神経の切断により全て消失し、その軸索は全て頸神経を經由する。従って延・頸髄移行部で、舌下神経主核につづく中心管腹外方に出現する舌骨下筋陽性細胞は舌下神経主核ではなく、同核と前角背内側核とをつなぐNucl. supraspinalisに存在するものと思われる。

以上の結果から、舌筋およびG H-MN存在域は舌骨下筋MN存在域の吻側部と吻尾方向に近接して一連の細胞柱を形成することが明らかとなった。また、舌筋およびG H支配の舌下神経核中には少数の頸神経經由運動神経細胞がその尾側部に存在し、舌下神経經由運動神経細胞存在域から頸神経經由運動神経細胞存在域への移行が舌下神経核と頸髄前角細胞群との間で明瞭に行われるのではなく、より吻側の舌下神経核尾側部内で漸次行われるものと思われる。すなわち、舌筋およびG Hは舌下神経のみならず頸神経經由の運動線維の支配をもうけるのに対し、舌骨下筋は頸神経經由の運動線維のみの支配を受け、ラットPlexus hypoglossocervicalisにおける頸神経ワナ上根中には舌下神経から下行し舌骨下筋に分布する運動神経線維は存在しない。

## 論文の審査結果の要旨

本研究はH R P法を用い、ラット頰下筋群（舌筋、オトガイ舌骨筋および舌骨下筋各筋）支配運動神経細胞の中枢局在とその相互関係ならびに、これら運動神経細胞軸索の末梢経路について検討を加えたものである。

この結果、舌筋およびオトガイ舌骨筋支配運動神経細胞存在域と舌骨下筋支配運動神経細胞存在域とは互いに分離したものではなく、舌下神経核から Nucl. supraspinalis を経て頸髄前角にわたる一連の細胞柱を形成することが明らかとなった。さらに、舌骨下筋支配運動神経細胞の軸索が全て頸神経を経由するのに対し、舌筋およびオトガイ舌骨筋については舌下神経のみならず頸神経を経由するものが存在することが明らかになった。

以上のように、西口隆彦君の論文は、ラット鰓下筋群支配運動神経細胞の局在ならびにその軸索末梢経路につき新しい知見を加えた優れた業績であり、歯学博士の学位授与に十分値するものと認める。